



キラキラ星のジッタ

夢枕 獺

集英社

(文庫・12/15刊・¥120)

不思議な哀感がある。いや、もうメロメロのストーリーなのだ。しかし、それはけつして子供向きのつたないものでも、人工的な雰囲気のものでもない——中編「そして夢雪蝶は光のなか」は、おなじみ、ねこひきのオルトラネが、恋に破れた主人公と出会う物語。九年に一度、異世界から上高地の冬の谷を訪れる、夢雪蝶のロマンスがからめられ、メルヘンと現実との融和は、極めて自然だった。

「山に魅かれるのは、あれは人間に魅かれることだとわかった」そう語る著者の、最新短編集が本書である。もちろん、山も出てくる。表題作は、「星」を食べて、空へと昇っていった猫の話。ほか、妖精を捜してくれという奇妙な広告を見つける「妖精をつかまえた」、ホラー風の小品「夢蟬蛸」を収めている。

夢枕獺は、着実に成長している。

大げさではないが、人生のちよつとした哀しみや輝きを肯定する、いくぶん照れたような思いが、ここには描き出されている。コバルト文庫という、少女向き双書が、著者に似合っているかどうかはともかく、その場を充分に生かした作品集といえるだろう。

爽やかな後味が残った。

(俊)